

困惑の近隣市町村に 根強い慎重論

安易な政治判断に走る道庁

ルポライター 滝川 康治

道民合意を軽視 結論を急ぐ道庁

幌延町への高レベル放射性廃棄物処分施設（仮称・深地層研究所）の立地問題をめぐって、道は庁内の委員会ですら「考え方」をまとめたのち、道内各層から意見聴取する手順を詰めている。しかし、人類史的な課題の処分問題を扱うには、あまりに拙速なスケジュールに戸惑いや批判の音が続々。旧動燃や国に翻弄された近隣市町村のなかにも慎重・反対論が根強い。幌延問題のいまをリポートし、安易な政治判断に走る掘道政に警鐘を鳴らす。



▶市民団体の説明や意見を聴いた道の第六回検討委員会（月24日）と、推進団体の看板が立つ幌延町開道地区（左下）

現地ルポ

合の具体的な措置（条例の制定や協定書の締結ほか）などを盛り込んだ「検討事項」が、事務局から示されていた。委員長代理の山口博司経済部長（当時）はそこで、計画を受け入れられるかどうか、六月中旬までに道の意思を出す」と発言。「立地申し入れを慎重に検討する」（堀知事）はずの委員会は、道民よりも先に道が可否を判断する、という主客転倒した運営を志向していたのである。

「道の方針を決めてから道民の意見を聴くことは、明らかに方法論上の誤りがある。道は、道民合意によって受け入れるかどうか方針を決めるのが筋」同懇談会の上田代表はこう批判し、発言の撤回を迫った。山口代理は「発言は舌足らず」としたうえで、道が示すのは計画に対する「一定の評価」だと修正した。が、評価の中身はいままで、今後示される検討委の「考え」いかんでは、行政が道民世論を誘導していく恐れがある。

道と市民団体のやり取りで焦点になっているのは、知事公約にある「道民合意」のありようである。

放射性廃棄物の処分について「道民合意も得られていない状況にある」との基本認識を示している。ならば、処分に向けた実証試験などを行なう深地層試験場計画については、合意が得られるまで徹底した調査と議論を重ねるのが道理というもの。何を焦って道は結論を急ぐとするのだろうか。

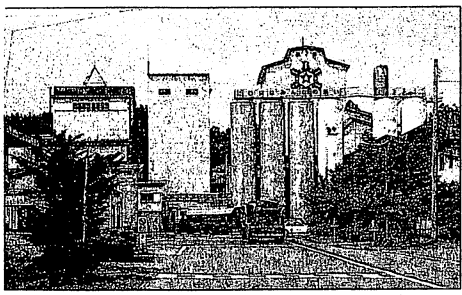
いまだ道が描く今後の手順は、
①道が設置する有識者懇談会（仮称・8人の予定）に意見を求める
②所管の経済部が海外事情調査を行なう（フランス、カナダ、スウェーデンの3カ国が対象）
③幌延と周辺の八市町村、札幌で自治体や諸団体、住民から意見を聴く
④これらを受けて、知事が受け入れの可否を判断する

この手順ではスケジュール消化のための形式的なものであり、「道民合意を前提に検討する」という知事公約は守られないだろう。道民や周辺自治体などに十分な判断材料が提供されず、じっくり議論することもなく、知事の政

問題再燃に困惑 慎重な近隣首長

六月下旬、わたしは道北の町を訪れて何人かの首長から話を聴いてみた。ほとんどの人が十分な情報を持たず、戸惑いや慎重な表情を見せた。

宗谷管内豊富町では九年前、町議会が貯蔵工学センター計画の「立地促進決議」を採択し、これに怒った住民たちが議長らの解職請求運動を起こした



酪農関係者の間では風評被害に対する不安が消えない（写真は雪印幌延工場）

経緯がある（リコールは成立。のちに議会は反対決議を採択。町を二分し、住民の間にはしりこも残った。農協の反対姿勢も強い（別項を参照）。

「深地層試験場問題に」関心のある町民は多いが、あまり触れたがらない。町内に対立を持ち込むような計画であっては困る。慎重に見守っている状況であり、町民全体を束ねる立場にあるので、はっきりしたことを言うのは避けた。道から聞かれても、こうしたことを言うようになるでしょう」

斉藤慶四郎・豊富町長は、困惑した表情を見せつつ、こう話した。

同管内中頓別町では、十二年前の町長選のしりこで二分された町議会の片方の陣営に動燃（現核燃料サイクル開発機構）が巧みに近づき、やはり「促進決議」を採択させようと試みたことがある。ここでも、のちに反対決議を採択し、混乱にピリオドを打っている。

今年四月に初当選した野邑智雄・中頓別町長は、

「議会の決議は大きな判断材料になるので、主旨は尊重していきたい。他町村のことで小さな町のなかで対立することにならなければいいな、と思う。」



「貯蔵工学センターは白紙」と言いつつ、写真右のプレハブでは警備が続く(幌延町開進で)

町民の意向を最大限尊重したい」と語るが、計画の自身がよく分らない、と不満も漏らす。

「支庁に資料を置いてある、というが、それを目的に行かなければ見れない。町民に聞かれても分からないし、知らないから答えられない。道は情報公開に努めてほしい」(野島町長)

昨年取材した浜頓別町の市川昇町長とは会えなかったが、「地元で混乱を起こすような施設はダメ」という見解に



原子力政策を議論する場を

稚内市長 横田 耕一さん

近隣市町村からの意見

稚内青年会議所の理事長時代の十二年前、例年に動燃委員の出席を求めたことがあり、私は隠し事があっては困る。情報の開示と言った。当時の動燃や国の対応は、あまりにも時代錯誤的だった。成田空港問題も含めて、有無を言わず場所を決めて、市民のコンセンサスを待たない、きわめて乱暴な手続きを踏むことがあったのではないかと。

幌延問題で歴代市政の慎重姿勢が当然です。市民も反対の意見の方が多く、行政が明確な姿勢を示さなければ、これは理解できません。

この問題は、北海道や幌延という次元から、長期的かつグローバルな視点で、原子力政策や高レベル放射性廃棄物の処分方法を考える次元に変える必要がある。そのためにも国や自治体、市民、企業などが具体的に議論する機会づくりを積極的に進めるべきです。

原子力で三〇％の電力を供給している現状や、「そこら出てもいい」という考えかたを、きちんと冷静に議論する場をつくるべきでなかったか、と思います。現状は、感情的になって喧嘩ばかりやって議論ができていない。「危険だ」「危険でない」という理由づけばかり探しているような気がする。当初の

変わりはないらしい。今年初め、来町した道担当者に対して、「なぜ幌延なんだ。この話は聞きたくない」と言葉が荒らげた、という。そこに同席した人の話である。

留管管内天塩町も動燃の計画をめぐって混乱した。酪農家を中心の住民グループが風評被害を心配して、札幌や旭川で消費者アンケートを実施したこともある。

漁協は天塩港の整備に期待して賛成に回り、東海村へ視察に言ったりした。が、いまは天塩漁協としての方針を持つていない。「理事会や組合の懇談会のなかでも、ひとつも声は出ない。深地層試験場の穴を掘ることで港が整備されるとは考えにくい。それが話題にならない背景かな」と増田政司組合長が解説する。

同町の本田善彦町長は、「以前は慎重な発言をしてきたが、今回は隣の企業誘致のようなもので、意見を申し述べられない。道の対応を見守っている。今後、町民の間で対立が生じると困る」と、慎重に言葉を選んだ。

いずれの町も、議会や住民のなかでの議論は少ないらしい。首長たちに共

「貯蔵工学センター計画」と「深地層研究所計画」の違いが若者男女を問わず理解できるレベルで情報公開され、将来にわたって「核抜き施設」であることが証明された段階で、私は最終的な考えを表明したい。

市長になってから道の担当者が来たのは先日初めてで、具体的な情報がない。そんな状態で今後道から意見を求められても困るのか見えないと答えられません。

今後、市民が積極的に議論しようとするなら、市は積極的にコーディネートしていきたい。でも、「賛成だ」「反対だ」と言っても職員を動かすだけなら、やってもしょうがないでしょう。私は選挙期間中、市民団体の質問状に、「リーディングな市の代表者として、この問題を積極的に議論するための機会づくり」に努めたいと答えられています。

(談)

通するのは、かつてのような混乱と対立の再燃を避けたいという心情と、計画内容の不透明さと情報不足へのいらだちがあるようだ。

総じて計画に対する慎重姿勢が強い。道の顔色をうかがう首長もいる。そんななか、「冷静な議論の機会をつくりたい」と言う横田耕一・稚内市長(別項を参照)の姿勢には共感を覚えた。

交付金に期待感 処分に火種残す

震源地の幌延町では、この問題に触れたがらない風潮が強い。

電源三法による交付金に期待を託して核廃施設の誘致運動に奔走した幌延町農協組合長の木村誠さんは、「(深地層試験場が)三法の対象にならないのは不満だ。施設ができるまでは固定資産税も入らないし、穴だけ掘っても、一時的に町が潤うかもしれないが、試験が終わったら火が消えてしまふ。推進の人は内心がっかりしていると思う。期待外れだな」と不満顔だ。三法の対象になるような原子力施設は、もう最終処分場しか

残っていない。そのあたりを聞くと、「俺が町長だったら、穴を掘ってしまつてから(処分場を誘致)するよ。どんなことでも世論に勝てないから、政治情勢次第だな。しばらく断壊のなかに潜ってなければならん。十年後の町長がどんな旗を振るかだよ」と、少し冗談めかして言う。「カネの成る木」を追い求めるならば、ありうる話ではある。

幌延町の理事者は昨年来「深地層試験場のみの誘致」に転換したことになっている。が、これは建て前のようだ。反対派町議の鷲見悟さんは、「五月の議員協議会で、助役は「深地層だけでいい」と発言したが、これが本音と思う。過去三代の町長は三法交付金の実現を金科玉条にして、環境や安全性は眼中になかった。最初からカネが目的で何でも良かった。いまは、深地層試験場の立地が決まるまで我慢している、というわけですよ」と解説する。十年先のことは誰も予測できないが、深地層試験施設が建設されると、処分場への火種を抱えることだけは確かである。

三月に開かれた道の検討委の席上、



酪農の里に 迷惑施設は不要

豊富町農協組合長 工藤 信義さん

豊富町農協では、理事会で一回、通常総会で三回、幌延町での高レベル放射性廃棄物施設計画に反対する決議をしている。牛乳のイメージに合わないし、安全が証明されない酪農の里、観光の町に核のゴミ施設はいらない、という理由からです。

うちの組合員数は百九十戸で、今年の牛乳出荷目標は七万ト。うち一割は豊富牛乳公社で市乳に加工し、全道のセイヨーマーケットで販売していますが、乳質の良いものを使っているのが好評なんです。残りの牛乳は雷印の幌延工場に出荷しています。

「廃棄物施設があるところの牛乳」では迷惑な話で、メリットは向かない。うちの組合員は九九％反対だ。計画の自身が(深地層試験場のみに)変わって、基本は変わらない幌延のワテでは全く受け止め方が違う。

組合員のなかには、機械の更新やフリーズ・トリル牛舎の建設などに金がかかるので、「百兩隊の演習場のように、受け入れる代わりにも補助事業があるなら」と言う人もいます。でも、それは邪道だと思っ

があり、金銭解決もなしでは、永久的に賛成にはなりません。深地層の試験場だけで話は終わらないだろう。結局、廃棄物を持つてこられるんではないか。カネが出るということは、危険と取り替えてこの話だからね。安全ならカネが出るはずがないし、幌延だってカネの話がなかったら誘致しなかったでしょう。TVコマーシャルで「石油」には限りがある。原発を「大星」に言わせているが、「原発を認めたんだから、発生したところで処分を」と言う人もいます。そのとおりだと思う。道民のなかにも、「幌延が誘致するのだから、北の端ならいいんだ」と言う人もいます。うが、近隣の町にしたら迷惑な話です。「それなら札幌に(廃棄物を)埋めてくれ」と言いたい。それが、原発を誘致したところで処理すればいい。メリットがあるから誘致したはずで、カネだけ余所に持っていくという考え方はおかしい。知事がどう言っても(道民の間に)信頼関係がない。道には、過疎に歯止めをかける別の振興策を真剣に考えてほしい。(談)

核燃は深地層試験場の立地場所について、貯蔵工学センター予定地だった開進地区から町内全体に広げて調査する意向を示した。核燃は、試験場の深さを「地下五百メートル程度」と計画している。かつて道などの反対を押し切って強行したボーリング地点では、「声聞層」と呼ばれる候補地層に到達しないためらしい。

こうしたなし崩しの計画変更に対して、長い間、反対運動の先頭に立ってきた町議の川上幸男さんは、

「開進は立地に適する」と言ってきたのに、いまさら変更するのはいい加減



農家の庭先などに掲げられた試験場反対の看板 (豊富町内)

二月までに知事が判断を下し、国の意向に配慮したことを示したいんですよ。『原子力政策をどうする?』といった深い問題意識はなく、目先の国との関係を円滑にしておきたいんです」

これが事実ならば、北海道は国の下請け機関にすぎず、堀知事が唱える「自主・自律の構造改革」にも逆行する行

道は、有識者懇談会(仮称)や道民意見聴取、海外調査を行なうための予算を第二回定例道議会に提案した。このうち、八月にも発足予定の有識者懇談会は、「検討委がまとめる『考え方』に対する意見を聴くことが基本。懇談会に判断の下駄を預けるものではない」(資源エネルギー課)として、知事の諮問機関とせずに参考意見を聞くにとどめる意向だ。道の当初計画では三回程度の開催しか予定しておらず、セレモニー的な色彩が濃厚だった。

が、これでは悪しき審議会方式よりも悪い形式的なものだ。この問題に対する認識の甘さを示すとともに、「審議を長引かせたくない」との政治判断が働いたと思われる。第一

第一期掘道政のもとでは、重要案件

な調査しかやっていない証拠だ」

と憤る。町内には断層が縦横に走ることを挙げて、「試験場や処分場に適した場所はない」とみる川上さんは、「本当に立地できるかどうか、基本の議論が欠けている」と批判していた。

核燃報告書に

立地確定の記述

不安や懸念、期待が交錯する道民の声をよそに、高レベル廃棄物の地層処分に向けた諸手続きが進んでいる。

総合エネルギー調査会(通産大臣の諮問機関)の原子力部会は今年三月、地層処分事業に関する法制度のもとになる「中間報告」をまとめている。年内に法案の骨子が固まる予定だが、処分の事業主体の設置法的な色彩が濃いものになる見込み。処分場の立地プロセスと試験施設との関係や自治体の拒否権などは盛り込まないようだ。

さらに、研究開発の中核機関とされている核燃は、今年十一月にも地層処分の技術的な拠り所を示した報告書(第2次取りまとめ)を発表する。道などに立地を申し入れている深地層試

験場は、「第2次取りまとめ」を根拠に初めて工学的な検討が始まる計画になっている。

が、道は何を焦ったのか、これが発表されないうちに検討を終える、という拙速なスケジュールを組んだ。検討作業は、国による法整備や技術開発などの動向を慎重に見極めなければ十分なしえない。これでは見当(検討?)違いというものだ。

今年四月、核燃は「第2次取りまとめ」に向けた技術報告書(第2ドラフト)を出しており、そこには幌延の計画について次のような記述がある。

「幌延の深地層の研究施設においては、処分場掘削、建設技術、人工バリア製作、搬送、定置技術等の地層処分システムに関する一連の工学技術に関して技術的な確認を行っていく」

いまは計画の可否について道庁内部で検討中の段階にすぎないのに、これでは立地が確定している記述である。

これは核燃の単なる内部報告書ではない。国内外の専門家のレビュー(批評)を受け、五月には東京で大きかりな発表会も開いているだけに、核燃は道や道民を愚弄したことになる。「計画

の返上」を求める市民団体からは、記述の削除を求める声が上がっており、道の対応が問われている。

安易な政治判断は掘道政の愚行

科技厅による深地層試験場の立地申し入れから一年あまり、これまでの経過を振り返ると、放射性廃棄物問題の基本を押さえた議論はまだ不足している。道は、国の原子力政策の流れなどを整理しつつ、自治体としての理念や方向性をもつべきであり、「初めにスケジュールありき」のような検討作業は、根本から見直されなければならない。

科技厅は道に対して「立地申し入れ」の回答期限を設けてはいない。法整備や技術開発は、二〇〇〇年が大きな節目になっており、その動向を検証してから回答しても遅くない。

が、道は今秋にも知事が可否の判断を下すスケジュールを描く。なぜ、そんなに急ぐのか。ある道庁関係者がこんな解説を加える。「来年度予算の大蔵原案がまとまる十

について道民各層の意見を反映させる施策が試みられた。公募委員を交えた意見交換会の開催やアンケート調査、公聴会などを行なった、土幌高原道路や松倉ダムほか「時のアセス」の対象事業。道環境基本条例の制定過程で行なった道民意見に対する回答集の作成作業。千歳川放水路問題での「拡大会議」の設置。たくさん試みがある。

原子力関連では、泊原発の増設をめぐる「道エネルギー問題委員会」がある。ここでは学識者と各界代表、公募メンバーを委員に委嘱し、二年あまりにわたって審議が続いている。長い間、道政の重要課題になってきた幌延問題は、最小限、この委員会に做った審議をすべきである。

こうした道民の意見を反映させる手法こそ、堀知事の公約に言う「道民合意を得ることを前提に検討を進める」ことにつながるはずだ。国の顔色をうかがい、安易な政治判断を下す愚行に走るのではなく、賛否を問わず徹底して道民の声を聴き、廃棄物問題の基本を押さえた議論を起していくことを強く望みたい。